ふるさと安曇野
きのう きょう あした
No.17　2018.6.30

死を見つめ　生を考える

葬儀場での葬式（平成25年　三郷）

生きとし生けるものは必ず死を迎えます。人もこの例にもれず、生まれた瞬間から死へ向かっての一歩を踏み出します。とは言え、現代の日本では子供の頃はもちろん、若いうちは死に触れる機会も、死について考える機会もあまりありません。その一方で、近年「終活」という言葉をよく見かけたり聞いたりするようになりました。終活とは、自分の死について考える、或いはその準備をするという意味で、マスメディアや書籍、葬祭会社の案内などでよく使われています。終活という言葉が溢れる背景には、大きな流れとして、日本が超高齢社会を迎えたことにあるでしょう。人生の終末をどう迎えるかや、自分らしい死について考えている高齢者が多いということが、容易に想像できます。また、もう一つの流れとしては平成23年（2011）に起きた東日本大震災があります。この未曾有の災害によって、多くの人々が平穏な暮らしや愛する人・故郷を、ある日突然失うという辛い体験をしました。東日本大震災は、死だけでなく地域社会のあり方や生きることそのものについても、多くの人が考え続けるきっかけとなりました。

死と葬式を考える

医療に委ねられる死　若者が死と触れ合う機会が少ない要因はいくつかあります。核家族化が進み、看護・介護や死を看取ることが家族や親族の手から離れ、医療の分野のものになったこと、地域の互助組織に頼って行われていた葬式が葬儀会社に委ねられたことなどです。かつては自宅で死を看取ったものが、病院や医療施設に変わり、死を確認するのは家族ではなく医師の診断によります。また、医療が進歩したことによって、少し前の時代なら手の施しようのなかった病気や怪我でも、命を繋ぐことができるようになりました。それは喜ぶべきことでもありますが、同時に「死」とは何かを問うケースも出現したのです。例えば、「脳死」というケースがあります。誰しも家族が生死の境にあれば、何としても生きてほしいと願います。生命維持のための装置をつけるか否か、その選択が一分一秒を争う場面で、家族が生きるための選択をするのは当たり前とも言えます。平成22年(2010) いわゆる「改正臓器移植法」が施行され、本人の意思表示がなくても家族の承諾があれば、15歳以下の子供でも臓器の提供が可能になりました。脳死の判定にはその資格を有する医師が法的に必要なガイドラインに沿った様々な検査を実施することが必要ですが、最終的に生死を選択するのは、生前の本人の意思が表明されていない場合、家族となります。「死」は医療の領域から、突然家族へと委ねられるのです。

イエと墓を継ぐ　イエの存続に重きがおかれた時代は、結婚して子をなすことが当たり前とされてきました。年の順に亡くなれば、子や孫など家族が葬式を出し、イエや墓を守ってくれました。しかし、現在は個人の価値観に重きがおかれ、生き方そのものが多様化しています。結婚や出産することが当たり前でなくなり、イエや墓を守ることはさして重要ではないと考える人が増えてきました。しかし、現実的な問題として後に続く子孫がいなければ、死を迎えるにあたり財産や墓、わが身の処し方までも決めておかなければなりません。死を考えることは、そこへ向かってどう生きるかを考えることでもあるのです。

では、かつてごく当たり前に自宅で死を迎え葬式を行っていた頃、人々は死をどのようなものと考えていたのでしょう。そして、葬式を行う意味とはなんだったのでしょうか。ここでは昭和30年代～40年代初め頃を中心に、かつての安曇野の人々がどのように死を迎え、どのように死者と別れるための儀礼を行っていたのかをご覧いただき、自身の人生の終末や葬式について考えていただく機会にしたいと思います。

死者を送る

死を確認する　安曇野で臨終を迎えるのは自宅で家族に看取られて、ということが当たり前だったのは、昭和30年代～40年代初め頃まででした。健康でも定期的に検診を受けたり、医学の知識が一般的になっている現在と違い、かつては病いや死をさまざまな現象と関連付けて感覚で語りました。「虫の知らせ」とか、「烏の一声鳴き」を死者があった知らせのように感じたり、戸をたたく音を夢に見ると死人が出るなど、死の予兆がいろいろ語られました。

死ぬということは、肉体から霊魂が離れ

て再び返らないことと考えられていたので、いよいよ死が近づくと、家族や近親者は病人の耳元で大声で名前を呼んだり、屋根峰で病人の名前を呼んだりして、肉体から離れかけた霊魂をなんとか呼び戻そうとしました。

しかし、さまざまに手を尽くしても、この世とあの世の境にある霊魂がいよいよあの世へ行きそうになると、「死に水」・「末期の水」と呼んで近親者が水を含ませた綿や筆などで唇を湿したり、急須で飲ませたりしました。死に水をとる順番は死者の跡取りなどからと順番の決まっていることもあれば、妻や嫁などが行うものとされていることもありました。それでも息を吹き返さず脈がなくなり、呼吸もしていないことなどを家族や親族で確認して、死が確定することを「目を落とした」などと言いました。名前を呼んだり、死に水をとることは段階的に死を確認する手段としての儀礼だったのです。

肉体と魂　死が確認されると、直ちに遺体を北枕に安置し顔に白布を掛けたり、屏風を逆さにしたり、立てまわすなどしました。遺体の布団の上に刃物を置いて、魔除けとします。遺体は魂がない空っぽの状態ですので、魔除けをしておかないと他の魂が入ってしまうと恐れられたのです。遺体を猫にまたがせてはいけないなどと言うのは、遺体に猫の魂が入って起き上がると考えたためです。仏壇を閉めたり、家じゅうの神棚に白い紙を貼って喪が始まります。マクラダンゴやナマダンゴといって、生の米粉を水で練って固めて団子を作ります。数は地域によって違い、三個、五個などの奇数や穂高では十二～十五個供えることもありました。左手で練ったものを余らないようにして団子にし、とうすみ皿（燈明皿）に盛り、糸枠を立てて載せ、枕元の経机に供えます。同時にマクラメシといって、生前使っていた茶碗に白飯を山盛りにして箸一膳を立てたり、左手で小さなおにぎりを一つのせることもありました。このマクラメシは霊膳としてお墓に持って行きます。親戚や同姓、親子関係にある家（ハネオヤ

コラム①　タマヨバイ

あまりにもびっくりすることを「タマゲタ」と言いますが、瞬間的に魂が抜け出してしまうぐらいびっくりした状態になるのです。その最も重大な状態が死で魂は消えて肉体にもどらなくなります。したがって、人が死にそうになると、魂が肉体から抜け出してしまう状態を何とか元にもどそうと魂を呼びもどす方策をとらねばなりません。それがタマヨバイとかタマヨビの行為です。タマヨバイは、多くは亡くなりそうな人の名前を枕元や屋根峰で呼んだりするのは、まさに魂を呼び戻そうとする儀礼ですが、これは魂がいると考えられている「場所」へ向かって呼ばなければならないので、魂の抜けた身体に向かって呼ぶより、屋根峰へ上がって呼ぶ方が古い形と思われます。呼ぶ時にしゃもじや襦袢、腰巻などを振って魂を呼び戻すこともありました。地域や家によっては屋根の一部に穴をあけ、病人に向って名前を呼ぶところもあります。どこへ向かって呼ぶかは「あの世（異界）」がどこにあるかを示しており、地域によって、海や山、また井戸に向かって呼ぶこともありました。

タマヨバイ

と子など)、オコシンナカマ（庚申講仲間)、近所の家に死を知らせます。この日の夜は、死者が寂しく無いようにと跡取りとなる家族などが添い寝をすることもありました

湯灌と納棺　現在、病院や施設などで亡くなると、ほとんどは清拭として身体を拭いて、鼻や耳などに綿で詰め物をするなどの処置をしてもらいますが、かつては親族が湯灌を行いました。湯灌をする人は死者と血のつながりが濃い人が、念仏を唱えながら行いました。堀金では湯灌をする人はその前と後に酒を飲んで、口を浄めたといいます。明科では納棺を行う人は尾頭付で切れ目のない魚（なんでもよい）を丸ごと食べておきました。生臭いものを食べておくことで、死者に連れていかれないようにという意味合いもありました。

湯灌は、盥に入れた水に沸かした湯を足す「逆さ水」を使い、ひしゃくを逆手に持って、外側に掛けるようにして行いましたが、昭和30年代には足だけ湯灌したり、手足や身体を拭う程度になりました。湯灌をする人の服装は、普通の衣服の上に荒縄の襷や帯などをしていました。この荒縄は刃物を使わずにねじり切ったものや、左縄になったものを使い、おったて結び（タテ結び）にしました。三郷温長尾では、大正時代末までは湯灌をする人も着物を左前に着たといいます。また、かつては死者の髪を剃って僧形にしましたが、昭和30年頃になると行いませんでした。こうして、死者の体を浄めてからあの世へ旅立つ支度を整えてやるのです。

死出の旅支度　死者には襟の無い着物を左前にして着せ、とった襟を帯にして結びます。その上に、経帷子、底の無い足袋・手

納棺（平成25年　北安曇郡松川村）

甲・脚絆・草履・頭陀袋などをつけて頭に三角の紙や頭巾を被せます。棺には遺体の他、死者の好きだったものや杖、老眼鏡などの生活道具、頭陀袋にはあの世への道中必要なケチミャク（血脈・仏式の場合、死者が仏弟子であることを証明する書付)・数珠・六文銭（三途の川の渡し賃と考えられている銭、穴あきの銭など)・米・山椒などを入れて旅支度を整えます。死者に配偶者がいる場合は、配偶者の髪を切って棺に入れ、夫婦別れとしました。

火葬が当たり前の現在は、寝姿のまま納棺する寝棺が主ですが、土葬の場合は座棺が用いられました。昭和30年代に土葬を手伝ったという人は、「杉のような材を使った桶で、タガ（桶を締め付ける枠・竹）が雑に作ってあったのが印象的」だったといいます。また座棺の場合は、遺体を膝を抱くような恰好にして納棺しなければならないので、死後硬直の前に膝を折って縛っておくなど棺桶に入るようにする必要がありました。そうでなければ、遺体の骨を折って納棺しました。また、遺体から出る体液などの対策として灰や藁、布団などが一緒に入れられ、隙間には晒布で作った枕を詰めるなどしました。昭和30年頃には花を一緒に入れることも行われるようになりまし

市内に残る焼き場

た。棺に蓋(ふた)をし、河原などで拾ったきれいな石で釘を打ちつけます。納棺が済むと死者が身に着けていたものなどを焼きました。集落の中に決まった場所があればそこで焼き、なければ墓地や屋敷内の敷地の一角などを利用して焼きました。この時に納棺に携わった人々が巻いていた荒縄なども一緒に焼きます。

土葬で穴を掘るには、寝棺のかたちでは掘りにくいことと、限られた墓地のなかでは座棺の方が場所を取らずに済むということがありましたが、昭和40年代の穂高牧では、寝棺で土葬をしました。寝棺でも完全な伸葬ではなく、膝を少し曲げる形にして納棺する場合もありました。三郷温下長(ゆたかしもなが)尾(お)では昭和30年代には墓穴掘りは業者に頼みました。穴は寝棺が隙間(すきま)なく入るように掘られていたといいます。

昭和10年代の葬式（松本市）

葬式の組織

葬式には大勢の人が集まるので、葬式を手伝うための相互扶助の組織がありました。安曇野では庚申講仲間がそれに当たり、10軒前後の家で仲間となっていました。庚申講仲間は仏教の宗派や神道など、宗教には関わりなく構成されています。実際、葬送

井口喜源治葬式　教育者の井口喜源治はキリスト教信者であったが、この写真からは、宗教による違いは見られない（昭和13年　穂高　小川写真館提供）

仏式の祭壇（平成25年　三郷）

神式の祭壇（平成10年頃　松本市）

の儀礼に宗派や宗教の違いはあまり見られず、僧による読経が神官の祝詞であったり、祭壇の作り方が変わる程度でした。庚申講仲間のないところでは隣組なども葬式を手伝いました。

庚申講仲間の家では、死の知らせを受けるとすぐにその家へ行き葬式の段取りをしたり、遠くの親戚などへ死を知らせたりしました。葬式の手伝いは夫婦二人で行くことが多く、三～四日ほどは手伝いました。安曇野で火葬が一般的になったのは昭和50年代なので、土葬が一般的だった昭和30年代は、何より庚申講仲間で重要な役割は墓穴を掘ることだったのです。そのため、庚申講仲間に入っていなければ葬式をすることもできませんでした。

遠くの親戚へ死を知らせにいく人のことをツゲビトなどと呼びましたが、この役目も庚申講仲間が担いました。重要な役目であるので間違いのないようにとして、必ず二人で行くものとされていました。昭和10年代までは、行った先では酒などをだしてもてなし、三郷小倉ではどんなに貧しくともツゲビトに食べさせる米は保存しておくものだと言われました。また、ツゲビトや寺へツゲに行く人は提灯を持って行きました。寺と葬儀の段取りの打ち合わせをしたり、参列者をもてなすための料理の準備から帳場まで庚申講仲間の仕事でした。火葬場ができると穴掘りの代わりに火葬の予約などもしました。死者の家族は、庚申講仲間に葬儀の細々とした段取りを任せることで、死者との別れを惜しむゆとりがありました。

死者との別れ

葬式の役と香奠　葬式のことは安曇野あたりでは「とむらい」、「ふこう」などと言いました。現在も葬式は、友引や仏滅の日などを避けますが、未申の日も「未往生申仏」などといって嫌いました。葬式は通常、昼から午後にかけて行い、家の入口などにすだれやのれんを掛け、「忌中」と貼り紙をして喪を表わしました。葬式の日は庚申講仲間や隣組などが帳場や来客の接待など主な仕事を分担して受け持ちます。料理は講の中で上手な人がいればその人を中心に行うか、集落で冠婚葬祭の料理を請け負う料理人に頼みました。給仕などは庚申講仲間の女衆が手伝いました。死者への供え物は、餅・饅頭・だんごなどを親族で誰が何を供えるか相談して決めました。また、野辺送りの葬列の役付きは、誰にどんな役を頼むかで、ムラでの付き合いなどが明らかになるため、喪主と同姓・庚申講仲間で年嵩や訳知りの人で話し合って慎重に決めます。役付きを一つ間違うと後々までの遺恨となることも少なくないからです。

くやみに来た人は喪主にくやみを述べ、帳場で香奠を出します。氏名や香奠の額が音信帳に記載されますが、音信帳は今後、この葬式で受けた義理を返す基となります。つきあいのある家で葬式が出た場合、この音信帳を参考にしながら義理を返していくのです。くやみに来る人の香奠は、近親や親子の場合金銭と餅が主でした。近所であれば、七つ鉢や色とりどりの布で作ったオジンギ袋に米四升、庚申講仲間なら行器などにいれて小麦粉二升を持ち寄りましたが、昭和40年代には米や粉はなくなり金銭に変

わりました。明治時代の音信帳に、すでに金と米など金銭とモノを両方持って行く事例がみえます。生前、見舞いに行かれなかった場合は、香奠と合わせて見舞金などを持って行くこともありました。会葬者へは、砂糖やお茶、シーツなどが返されました。砂糖の場合、一袋が１kgくらいと重く、同姓などを代表して香奠を持って葬式へ行った人が、お返しを持って帰ってくるのが大変でした。お返しや死者へのお供えのお流れとしての餅は欠かせず、葬儀の日は早朝から四～五臼（十二升ほど）も搗くということもありました。

出棺　いよいよ棺が家から出て墓場に送ることを野送り、野辺送りなどと言いました。かつては出棺前に僧侶が棺の蓋を取って中を検めましたが、昭和30年代には埋葬許可証があれば問題ありませんでした。近親者が焼香をし、葬列の役付きを帳場の者が読み上げました。棺は座敷口から出るのが一般的で、出せない場合は玄関から出ることもありました。出棺後、棺を安置した座敷に塩を撒いて掃き出し、団子をのせた糸枠を座敷口から足で蹴り出しました。明科では、出棺の時、着物を裏返して洗う真似をして干しました。その時には死者が煙にのっていくということで、ちり焼きと言って少し火を焚きました。

葬儀を執行する僧侶が何名かは家によって違います。導師一人の場合もあれば、ほかに役僧が何人かいる場合もありました。葬列も家によって違いますが、明治23年（1890）の豊科新田での戸主の葬式では、葬式役付きとして、導師案内（１名）、燈

昭和初期頃の葬列（三郷）

幼児の墓（手前　昭和24年のもの　明科）

コラム② 通常ではない死

生をまっとうしてして亡くなった通常の死と違った異常な死を遂げた死者に対しては特別な葬り方や供養をしました。七歳までの幼児や乳児が亡くなった場合は夜に弔いを行いました。かぞえで七歳までは一人前とは考えられていませんでしたので、家族だけで内々で行うことが多く、墓も小さな石を積み重ねるだけでした。妊産婦が死にそうな場合は、酢をどんぶりに入れてその中へ焼けた石を落としてにおいを嗅がせて気を取り直させるなどということもしました。また、妊産婦が亡くなった場合は、身二つにしてやらなければ成仏できないとして、腹から子を取り出したり、人形などを一緒に葬りました。また、その成仏を願ってミズセガキ（水施餓鬼）を行いました。ミズセガキは流れ灌頂とも言いますが、人通りの多い川の端などに「南無阿弥陀仏」などと書いた白布の四隅を細竹などに結んで張り、通る人にひしゃくで水を掛けてもらい、その文字が見えなくなる頃に成仏するなどと言われました。明治11年（1878）に日本を旅した英国女性イザベラ・バードも越後（現在の新潟県）でこの流れ灌頂を見て記録に留めています。生をまっとうできなかった人のこの世に対する未練は、普通に死んだ場合よりも強く、産死した女性はその最たるもので産女（うぶめ）という幽霊になったり、子育て幽霊などになってなかなかあの世へ行かれないとして言い伝えられていました。

籠（２名）、旗（４名）、六具（２名）、雪洞（２名）、香爐（１名）、金剛杖（１名）、鍬（１名）、四花（２名）、霊膳（１名、喪主の妻）、位牌（喪主・跡取り１名）、生持（子か孫・２名）、棺附（親族・２名）、天蓋（親族・１名）となっています。これは、昭和初期の穂高でも奠茶や奠湯が加わる程度であまり変わっていません。死者の近親者は「いろ」と言って白いきれを首に掛け、素足にわらじ履きでしたので、一見してすぐに死者の近親と分かりました。野辺送りには葬列やくやみに来た人とは別に集落の人たちが大勢見送りに行きました。

埋葬とたな上げ

埋葬する　葬列が墓地に着くと、棺を石などで作った蓮台に置きます。棺の周りを役僧が鉦を叩きながら先導し、参列者が左回り（時計と逆回り）に三周します。明科では導師が念仏を唱える間中回りました。導師が引導を渡し、棺を埋葬します。棺は縄で縛って頭を北にして穴に降ろします。家族や親類が念仏を唱えながら小石を投げ入れ、その後、庚申講仲間が穴を埋めます。土を盛り上げ土まんじゅうを作り大きな野面石を載せて印とします。盛り土の上には中央に位牌を置き、後ろに七本塔婆、前に霊膳、両脇に金剛杖や鍬や鎌を差し込んでおきます。

穂高矢原は地下水の水位が高く、少し掘ると水が出て土が崩れやすいため、墓穴掘りは前日に行っておきました。それでも水が出ると棺が浮いてしまうので、人が上に乗るなどして押さえて埋めました。埋めたところは獣が掘り出したりしないように竹で囲いをしたり、鎌を差し込んだり吊るし

蓮台の残る儀礼場跡（平成30年　豊科）

コラム③ 火葬の普及と葬儀の変化

火葬の普及は都市部から始まりますが、安曇野では昭和50年代半ばまで土葬が行われていました。火葬が行われるのは伝染病で死んだ人や行き倒れの人など特殊な場合でした。火葬する施設がない時代は人里離れた原野や山林・河原などが利用されました。伝染病による死者を焼く場合、穂高では役場の係員や地域の衛生委員・警官・家族の立ち合いの下、穴を掘った中に棺を入れ、棺の下に石を置いて、その隙間に薪を山積みにして石油をかけて焼きました。

安曇野で火葬が普及したのは昭和53年（1978）に広域の火葬場が設立されてからです。火葬が普及すると、当然ですが野辺送りが無くなり、墓穴を掘る必要も無くなりました。遺体は通夜（納棺）の翌日、葬儀の前に火葬にし、葬儀は骨葬で行うことが主流になりました。やがて、葬儀会社などの参入により、葬送の儀礼は簡略化、或いは省略され、まるで「ベルトコンベヤーに乗っているような感覚」の葬式へと変わっていくのです。墓も土葬では個別の墓石を立てていたものから「先祖代々」などと彫られた墓石に変わり、納骨方式へと変わりました。

納骨用の墓（手前）と土葬時代の墓（奥）
（平成30年　豊科）

たりして魔除けとしました。また、息継ぎとして竹を土に差しておくこともしました。

たな上げとご苦労呼び　墓から帰ると、門口で用意しておいた塩と米ぬかをつけ、ひしゃくで水を手にかけて浄めます。松本市域ではこの時も逆さ水を使いました。この後、会葬者はたな上げとして会食をします。たな上げはかつては埋葬の翌日にしていましたが、昭和30年代には埋葬後すぐに行うようになりました。昭和40年代に穂高牧で行ったたな上げでは料理人を頼みました。移動式のかまどを庭に据えて、てんぷらや煮物などを作りました。店で買うのはまんじゅうと酒だけで、葬式での料理はすべて庚申講仲間や隣組などが作りました。料理は大皿に盛って取り分けて食べますが、僧侶や神主などには膳で出すこともありました。献立は大体決まっていて、塩結び・のりまんじゅう（まんじゅうを海苔で寿司のように巻いたもの）天ぷら・こんにゃくと油揚げの刺身（煮物）・豆腐と青菜のみそ汁・豆腐よせ（羊かんのようなもの）・ひじきの白和え・季節の煮物と酒がつきました。会葬者は全体でも30人ほどで、親族のほかは死者の友人や地域で関わりのあった人だけでした。

現在でも葬式と言えば油揚げとこんにゃくの刺身・塩むすび（手前右）が出される（平成25年　北安曇郡松川村）

たな上げ（平成25年　三郷）

たな上げは精進落とし、忌中払いなどとも言います。この時、お供えした大量の餅やまんじゅうなどの菓子は会葬者に持ち帰ってもらいます。また、葬式を手伝ってくれた講仲間や隣組、近所の衆へはご苦労呼びと称して親族が接待をしました。ご苦労呼びは、たな上げの後に男衆をもてなし、什器の片づけなど最後まで手伝ってくれた女衆は翌日にもてなすということも多かったのです。ご苦労呼びまで終わると葬式はようやく一段落します。

コラム④

出棺の時に糸枠を蹴りだしたり、塩を撒いて掃き出しりする行為は、死者の霊が家にとどまらないようにするためです。松本市域では、出棺後、戸障子をしめて死者の霊が母屋に戻らないようにしました。また、埋葬後、家に着いた際に塩や小糠・水などで手や足を洗い流す行為は死者の霊が着いてこないように断ち切る意味合いがあると考えられています。一方で、死者の霊は四十九日まで屋根峰にあるなどとも言われており、生者の死者の霊に対する複雑な思いが表れています。

魂の行方

死後の法要　死者の魂は亡くなってから四十九日までは家の屋根のあたりに留まっていると考えられていますので、仏式の場合は七日目ごとに（神式の場合は五日、或いは十日ごと）法要を行います。七日目まで

家族は毎日墓参りをします。また初七日には墓前で、四十九日は「しじゅうく」と言って僧を呼び経をあげてもらいます。四十九日も餅を搗きます。穂高では、この餅つきの音を聞いて、屋根峰に留まっていた仏（魂）が俗界を離れてゆくと言われ、お寺へは必ず餅を届けることになっていました。亡くなって四十九日目に死者の魂はようやくあの世へと旅立っていくのです。また、四十九日までの間は、死者のケガレがあるとされ、ムラの祭りへの参加やお宮へのお参りは慎（つつし）みました。かつては七日ごとの法要のほかに、亡くなった翌月からの月命日や百日目（ひゃっかんち）などにも僧を呼び、経をあげましたが、昭和30年代にはあまり行われなくなりました。また、現在は葬式の日に初七日まで合わせて行うことが多くなりました。

四十九日は忌中明（きちゅうあ）けともいい、一連の葬送の儀礼はこの日の法要で一段落します。残された家族もこの日を境に、死者への未練を断ち切って普段の暮らしへと戻っていくのです。

コラム⑤　位牌分け

安曇野では四十九日の法要の際に、集まった子供や分家した親族などに位牌分けをしました。位牌分けは財産の分与とは関わりなく行われ、子が等しく親をまつるという意味合いがありました。嫁に出たものは嫁入り先の仏壇に親の位牌を入れさせてもらうなどして親をまつりました。また、死者の着物などもこの日に形見分けします。この時来た兄弟姉妹が同時に葬家を出ることを忌んで、少し時間差をおいて出ました。

コラム⑥　堂守

安曇野には墓地の近くなど各地に小さな堂があります。堂は江戸時代から各地にありましたが、堂によっては昭和30年代まで庵主様とよばれる尼僧や男性の堂守がいました。豊科高家熊倉（たきべくまくら）の堂にも庵主様がいて、毎日墓に向かってお経を読んだり、月命日などには家へ訪れてお経をあげてくれたりしました。集落の家でもお供えとして野菜や米などをあげたり、お経をあげてくれた時などには地域で申し合わせた金額を渡しました。三郷明盛一日市場（ひといちば）では500円だったということです。松本藩は明治維新の際の廃仏毀釈が激しく、堀金では寺が無くなってしまいました。遠方の寺から僧を呼ぶのは大変なことでしたので、家の近くの堂に住み気軽にお経をあげに来てくれたり、些細なことでも相談ができる庵主様の存在はありがたかったといいます。

熊倉の堂（現在は新しく建て直されている・仏法寺跡）
（平成30年　豊科）

死者供養と年忌

新盆（あらぼん）・新御霊（あらみたま）

亡くなって最初の盆を新盆、年末を新御霊と呼び、死者を迎える特別な装置を作りました。安曇野は月遅れの八月が盆で、新盆の家では、八月初めには仏が夜道に迷わぬようにと「高灯籠（たかどうろう）」を庭や軒先に高く掲げました。仏を迎えるための盆棚に、養蚕の棚や給桑台（きゅうそうだい）を利用することもありました。僧に経をあげてもらい、親戚は線香や盆灯籠、庚申講仲間は丼（どんぶり）などを持ってお参りに行きました。

年末の新御霊も同様に親族や近所の人などがお棚参りに訪れるので、家人も同様に接待しました。現在でも新盆や新御霊はよく行われており、新御霊などは年末の忙しい時期に出かけることが出来ずに大変など

高灯籠（平成29年　堀金）

ということをよく聞きます。かつてのように大家族であれば問題ないことなども、家族人数の少ない現在では大変なこととなり、新御霊をお断りする旨を書いた紙を玄関に貼った家を見かけます。

コラム⑦　満願寺のホトケムカエ

穂高牧にある栗尾山満願寺は、真言宗の古刹で明治維新の廃仏毀釈も免れ、今に続いています。八月九日は穂高牧の満願寺の施餓鬼の日で、安曇平の各地から「ホトケムカエ」として宗派に関わりなく精霊迎えに行きました。昭和30年代に堀金烏川岩原からホトケムカエに行った人は神道でしたが、父親と一緒に自転車で行き、帰りは人を背負っているように背に手を回して帰ったといいます。バスや車のない頃は、お籠りといって前日に訪れて一晩泊まる人も大勢いました。多くの人が寺からの帰り道に、満願寺近くで子供たちが売る盆花や山椒を買いました。山椒は盆に食べるエゴ（エゴ海苔という海草を使った寒天のようなもの）につける山椒味噌に使います。バスや車での参籠者が増えると、子供たちの盆花は売れなくなったといいます。

満願寺山門

仏式であれば、亡くなって一年目には一周忌、その後は三・七・一三・二十三・三十三年に年忌供養を行います。三十三回忌は「トイジマイ」と呼んで、僧侶にお経をあげてもらい、ヤナギなどの木を削って戒名を書いた「イキトーバ」を立てました。三十三回忌を特別に行うこともありますが、他の故人の年忌を合わせて行うことも多く、神道の場合は五十年祭と言って、死後五十年まで行うこともありました。この年忌を最後に個人としての年忌は行われず、この後は家を守る神に近い浄化された魂である祖霊としてまつられていくことになります。

仏式の新盆の盆棚（平成28年　明科）

神式の新盆の盆棚（平成10年頃　松本市）

現在の葬式　そしてこれから

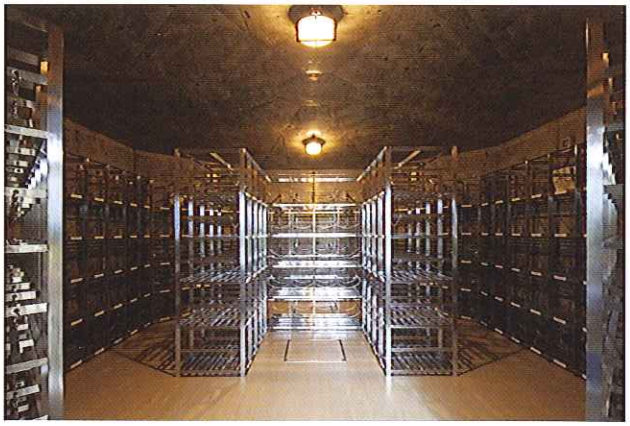
葬式は誰のため？　ここまで見てきたように、かつての葬式では家族や親族（血縁）、講仲間や隣組・近所の人々（地縁）、僧侶

や神官（無縁）などによって、一連の儀礼にのっとって死者があの世へと送られます。これは、誕生の際に行う儀礼と対をなしています。誕生の際は魂を定着させるためのさまざまな儀礼をします。葬送の際は、死者の魂を確実にあの世へ送るための儀礼をします。儀礼をひとつひとつ重ねることによって、死者は生者の世界から徐々に切り離されていきます。魂の抜けた肉体は土葬或いは火葬され、魂はあの世へ送られます。同時に残された家族にとっては、儀礼をすることによって、家の跡取りを明確にしたり、死者への思いを断ち切ることが出来るのです。言い換えれば、葬式は死者を送るためのものであり、この後も生きていく家族のためのものでもあるのです。

昭和50年代になり、葬式を行う場所が自宅から公民館・葬儀場や寺へと変わり、埋葬方法も土葬から火葬へ移行しました。それまで親族や講仲間の力を借りなければ出来なかった葬式を業者が肩代わりするようになります。葬式は業者や火葬場のスケジュールによって行うので、簡略化、或いは省略される儀礼もあります。会葬者も死者との縁のある人よりも、喪主など親族との縁、特に仕事上の付き合いのある人が増えたことで、会葬者が千人を超えるような葬式も珍しくなくなりました。一方で地元新聞のお悔やみ欄（らん）を見ると、葬儀場を利用するものの家族だけで既に葬儀を済ませたというものも増えてきました。

また、安曇野ではまだ樹木葬などは見られないものの、後継者がいないため「墓じまい」の必要に迫られる人もいます。

私たちの暮らしは緩（ゆる）やかに変化しています。葬儀や墓のあり方もそれにともなって



平成30年1月から募集が始まった市営霊園の合葬墳墓と内部

変化していきます。死がいつ訪れるのか予測できませんが、生まれた時から死亡率は100％と決まっています。自分がどのような最後を迎えたいのかを考えることは、その瞬間まで自分がどう生きていくのかを考えることでもあります。残された時間はそれぞれ異なりますが、これからをどう生きるかを考えることが私たち一人ひとりに与えられた課題でもあるのです。

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あしたNo.17」
編　集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　平成30年6月30日
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-8
TEL：0263-72-5672　/　FAX：0263-72-7772
URL：http://azuminohaku.jp/